実践と研究を編む

（４）研究者に求められる「巨視的」な視点と「長期的」な視点

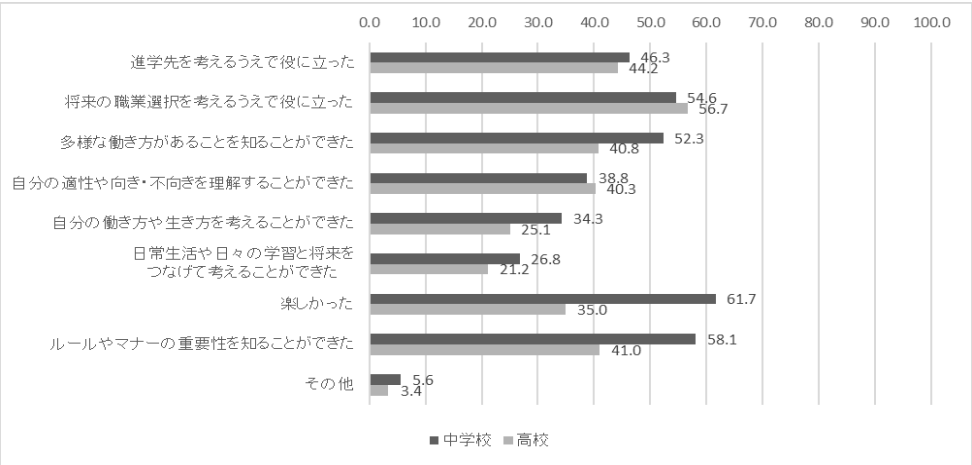
私が担当する最終回として、実践と研究を編む上で研究者に求められている（と私が感じている）視点と、その視点に基づき実践者と共有したい素材例を紹介します。

これまでにもお伝えしたように、教育臨床社会学では「マクロ」「メゾ」「ミクロ」のどのレベルにおいても実践への還元を第一義としています。研究を還元すべき現場はさまざまであり、期待される実践性への要請も多様です。特に学校現場では、実践者であれば当然ですが、目先の活動方策や短期的な成果に目を向けがちです。であるからこそ、研究者は「巨視的」な視点と「長期的」な視点を持って実践者に向き合い、実践と研究を共に編むことが求められています。

ここでは、中学生の「職場体験の意義」をテーマに「巨視的」な視点・「長期的」な視点に基づく素材例を挙げてみたいと思います。

まず行政機関による全国調査に基づく「巨視的な」視点は、実践と研究を編む「足がかり」になります。国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2020）による「キャリア教育に関する総合的研究」によれば、職場体験活動に参加して「有意義な活動だと思う」中学 3 年生、就業体験活動（インターンシップ）に参加して「有意義な活動だと思う」高校 3 年生、ともに 90%を超える非常に高い結果を示しています。さらに「有意義な活動だと思う」と回答した生徒を対象に、「どのような点から有意義な活動だと思ったのか」について尋ねた結果が下図です。

図．職場体験・就業体験の意義（望月 2021）　※複数回答可



この図を素材として、「実践者はどこに着目して、どのように解釈するか」に耳を傾けながら、研究者には、学校現場での課題を究明し、その要因を探り、より積極的に課題の改善に向けた提案をすることが求められます。

また各学校の在学期間を超えての「長期的な」視点からみれば、各学校が設定した目標やねらい以外にも、さまざまな影響や効果を生徒にもたらすことが分かります。以下は、望月（2021）でコラムとして取り上げた「大学生が自身の職場体験を振り返った記録（傍線部は筆者のよるもの。個人情報に関わる箇所は修正）」と私の補足レベルの考察です。

<A さんのケース>

私は教師になることが夢だったので、小学校に職場体験に行きました。担当クラスの授業の補助や、用務員さんの手伝いをしました。実際に目にしたり、体験をすることで、その職場について深く知ることができました。例えば私は 1 年生を担当したのですが、想像していたより体力が必要であると感じました。学校に慣れていないためか、長時間椅子に座っていられなかったり、授業中にいきなり話し出したりしてしまう子もいて大変でした。しかし実際に体験することで、なりたいという気持ちが強くなりました。

A さんは、希望している職場を体験し、そこでの大変さなども体験した上で、その職業への希望を一層強めた例です。現在は、大学の教育学科に所属し、その希望を現実にするために努力を重ねています。

<B さんのケース>

私は当時、保育士になりたいと思っていた。だから、私は幼稚園に職場体験に行った。実際に行ってみると思っていたようなものと違ったが、そのおかげで想像力が膨らんだ。保育園の先生に密着し、実際の業務内容を学んでいく中で、私は幼稚園(保育園)の先生よりも学校の先生の方が向いているような気がした。だから、私は現在教育学科に進学している。恐らくあの職場体験が無ければ、私は保育の専門学校に通っていたことであろう。そう考えると、あの体験は本当に貴重で大切な体験であったと思う。私の人生の選択を変えた大きな瞬間であったからこそ、この体験はとても印象に残っている。

B さんも、A さんと同様に、希望している職場を体験しています。ただし A さんとは異なり、職場体験によって希望する職業を変更した例です。「希望している職場の体験をした結果、別の職業の方が向いている」という実感を得ることができたという点で、本人も記しているように、この職場体験は貴重な機会であったといえるでしょう。

<C さんのケース>

私は本屋や図書館での体験を希望したが、人数の問題で行くことができず、先生が選んだ職場へ行くことになった。そこの商品が好きだったわけではないし、接客にも自信がなかったので、はじめはとても不安だった。しかし、やってみると色々な発見があって楽しかった。中学生の私にとっては驚くような工夫や知識があり、接客も楽しんで行えた。この体験から、私が将来なりたい職業について何もしらないことに気づいたし、今まで考えていなかった職業も興味が湧き調べてみる、など貴重な体験となった。

C さんは、希望する職場での体験はできなかったが、体験した職業の楽しさや工夫を感じることができた例です。本人も記しているように、希望していた職業を含めて職業への理解不足に気づき、調べることにつながる好機となっています。

<D さんのケース>

私は、友達のお母さんが働いている病院で職業体験をした。実際の現場を見ることは貴重な体験で、ドラマで見る理想とは違い、過酷でキラキラした世界ではないことを学んだ。当時の私からすると、職業体験は結構きつくて、教えてくれた看護師さんも仕事で忙しいため、私たちを相手にしてくれる時間はあまりなかった。しかし、本当の社会はこのような世界なのだと知ることができて、自分の将来を考え直すいい機会だった。

A さん、B さん、C さんのように、特定の職業希望をもって職場体験をする生徒ばかりではありません。D さんは特定の職業希望がない状態で職場体験をし、その職業に対する理想（イメージ）とは異なる現状を知った例です。本人も記しているように、リアルな職業世界を体験することで、自分の将来を考え直す機会となっています。

<E さんのケース>

私は〇〇で職場体験をしたが、2 日でもう働きたくないと感じた。この情報は、今に役立っている。莫大な量の職業から生涯働いていく職業を選ぶ際にまず必要なのは、働きたくないと思う職業を見つけることだと考える。そして、色々な職業を見てきたときにようやく「天職」というものに出会えるのだと思う。そういった考えを持たせてくれた職場体験は貴重なキャリア教育であったと今でも感じる。

E さんも特定の職業希望を持っていませんでしたが、体験した職場では働きたくないと感じた例です。事後指導が特に必要なケースですが、「働きたくない職場や職業」に気づき、職業選択のあり方を自分なりに考えるに至ったという点で、貴重な機会となっています。

いずれの記録からも、大学生になった今、職場体験から得たものが進路選択上の財産となっていることがわかります。このような素材を実践者に提供することにより、実践と研究を編みこむことになりうるではないでしょうか。

拙い連載にお付き合いいただき、ありがとうございました。今後も実践者（や研究者）の皆さまと協働していくつもりですので、興味のある方はお気軽にお声掛けください。

【引用・参考文献】

・国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2020）「キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書」
https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_SogotekiKenkyu/

・望月由起（2021）『学生・教員・研究者に役立つ進路指導・キャリア教育論-教育社会学の観点を交えて-』学事出版.

（日本大学文理学部教育学科　望月由起）